

HOTERES

週刊 ホテルレストラン

2022 10 | 7



特集

補助金・助成金の活用で ホテル経営を再構築

TOP INTERVIEW

ABアコモ(株) 常務取締役 阿部吉文氏

クロス ホテルズ&リゾート 代表取締役社長 ハリー・タリワー氏

Cover: クロス ホテルズ&リゾート 代表取締役社長 ハリー・タリワー氏

連載『ホテルを愛する新しい理由』 Ver 20

いまこそ真価を発揮するラグジュアリーホテルの秘密

La Réserve Paris Hotel and Spa

42 Avenue Gabriel 75008 Paris

「ホカンス」という旅スタイルとは？

「ホカンス」という言葉をご存知だろうか？先日某TV局のディレクターさんより、新しい旅スタイルとして話題の「ホカンス」を取り上げることになったので、ラグジュアリーホテルでの楽しみ方について話を聞きたいと連絡があった。「ホカンス」とは「ホテル」と「バカンス」を組み合わせた韓国生まれの造語。コロナ禍で混み合う観光地などには行かず、ひたすらホテルにいて、食事や Spa、プールなどを楽しむ滞在スタイルのことだそう。でも、私にとってはえーっ？いまさら？！という感じだった。だって高級ホテルに泊まったら、そのホテルをじっくり楽しむのがホテルラバーの掟。いや、高い宿泊代金の元は取りたいと言う関西人の悲しい習性かも知れませんが(笑)。とにかく私は30年以上も前からホテルありきで旅先を決め、ひたすらそのホテルを“感じる”旅を実践してきた。とはいえ、このホカンスという言葉の響きはどうぞも好きになれませんが・・・(笑)

Paris のパラスホテルの底知れぬ魅力

そういう意味で Paris のパラスホテルはホテルに居続けたいと願う代表格だ。ご存知のように「パラス」とは5ツ星以上のさらに上に行く最高級クラスのホテルのこと。歴史、格式、サービス、設備、スタッフ、果てはアートやフラワーアレンジメントに至るまで、すべての面で突出し独自の世界を持つホテルにフランス政府が与える称号だ。まさに究極のラグジュアリーホテルですね。パラスの格付けがスタートしたのは2011年。現在、フラ



ンス全土に31軒のパラスホテルが存在し、そのうち12軒がパリ市内にある。

Parisにある全パラスホテルを制覇するのが夢だと言うホテルラバーも多い。私がこれまで宿泊したパラスは「フォーゼズンズ・ホテル・ジョルジュ・サンク・パリ」「ル・ムーリス」「プラザ・アテネ」「ル・ブリストル・パリ」「ラ・レゼルブ・パリ・ホテル & Spa」の4軒。まだまだパラスの白帯だが、私が思うパラスの魅力とは、他のラグジュアリーホテルでは感じたことのない鳥肌が立つ瞬間が味わえるということ。ミュージカルでもオペラでも凄い作品は鳥肌がたつ。そしてそれが癖になり何度でも観に行きたくなる。でもホテルで鳥肌が立つ体験はそうそうない。

「フォーゼズンズ・ホテル・ジョルジュ・サンク・パリ」ではエントランスに飾られたジェフ・リーサムの花たちに。「ル・ムーリス」ではヴェルサイユ宮殿の「平和の間」をモデルにしたダイニングレストランで。「プラザ・アテネ」ではスイートルームのテラスからエッフェル塔の

シャンパンフラッシュを見た夜に。「ル・ブリストル」ではミシュラン3ツ星のシェフ、エリック・フレッシュの一品を食べたときに。それはもうぞくぞくするというか、くらくらするというか、鳥肌が立ちました。パラスホテルとは、究極の夢を見せてくれる空間なんですね。

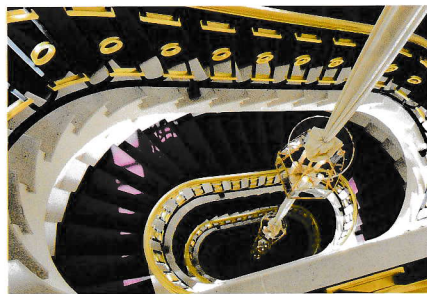
Paris の宝石

究極のスマールラグジュアリーホテル

そんな中でも「ラ・レゼルブ・パリ・ホテル & Spa」は、これまで私が知るパラスとはまるで違う美しさを秘めていた。パリ、ガブリエル通り。フランス大統領官邸のエリゼ宮の近くにあり、そのエントランスは車寄せもなく、知らなければ通り過ぎるほどさりげない。パラスホテルといえば、壮麗なファサード、絢爛豪華なロビー・・・という想像を見事に裏切られる。でも、一歩中に入るとただものではないオーラと輝きに圧倒される。客室数もわずか40室。うちスイートが26室ある。築160年余りのオスマン様式の建物で、かつてデザイナーのピエール・カルダンの邸宅だった。ホテルの改造を手がけたのは著名な建築家、デザイナーであるジャック・ガルシア。パリの「オテル・コスト」やモナコの「オテル・エルミタージュ」などを手がけた大御所だ。ロビーはなくサロンのようなレセプションがあり、鮮やかな真紅の円形ソファがまず目に飛び込む。歴史的建造物でありながら、モダンな家具、照明など至るところにエッジが効いていて「オテル・コスト」のような色気とフランスならではのエスプリがあり、エレ



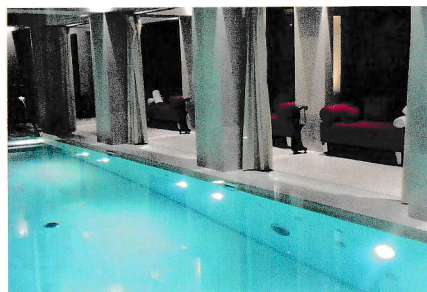
サロンのようなレセプション



パリらしいクラシックな螺旋階段



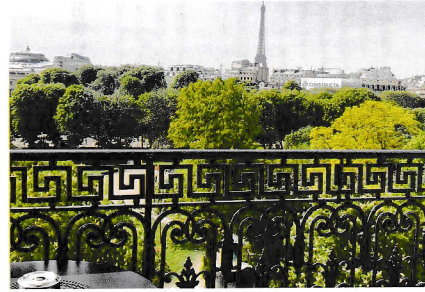
ホテルゲストがランチなど楽しめるライブラリー



地下にあるスパエリア



大理石を豪華に使用したスイートのバスルーム



スイートのテラスからはグラン・パレス、エッフェル塔が

ガントな大人のための「オテル・コスト」という感じだ。

2015年にオープンしてなんと2年もたたないうちにパラスの称号を手にした。現在、パラスの中でも最も小さいホテルだ。しかしそのサービスはまるで日本の老舗高級旅館のようで、マニュアルではないかゆいところに手が届くキメ細やかさ。日本旅館や料亭のようなホスピタリティで、世界中のスーパーVIPを満足させたいというコンセプトだそう。外資系ばかりのパラスホテルの中でも唯一フランス人がオーナーのホテルでもある。オーナーのミシェル・レイビエ氏はシャンパンを手がけていることでも知られ、ホテル内にある2ツ星レストラン「ル・ガブリエル」では、もちろんシャトー・コス・デストウルネルのチームが手掛けるミシェル・レイビエのシャンパンが楽しめる。ホテルのシンボルである像のエチケットが可愛い。このシャンパンは日本でも手に入る。

Paris 的 最高に贅沢な滞在

「ル・ガブリエル」の料理はモダンフレンチ。手がけるのはジェローム・バンクテル氏。「ランブrowジー」「ルカ・カ

ルトン」などで活躍した逸材。笑顔が素敵でシャイで、でもその料理は繊細にして骨太だ。パリジャンやパリジェンヌを魅了している。

でもわたしがこのホテルでいちばんぞくぞくしたのは、3000冊の古書を飾ったライブラリーだ。なんともいえない上品で深みあるグリーンを貴重にした、英国紳士が集うプライベートサロンのような趣だ。19世紀のパリにタイムスリップしたような気分になれる。私が億万長者になったなら、自宅にこんなライブラリーを作りたいと心から願った。朝から夜までホテルゲストはここでお茶を飲んだり、ランチを楽しんだりできる。もちろん本も自由に読める。

朝目覚めると、中庭の見えるラウンジで朝食を食べ、ライブラリーでお茶を楽しみ、地下にあるプールやスパでのんびり過ごす。ランチは光がさんさんと差し込むテラスの席でマグロのタルタルとシャンパンを。そして夜はドレスアップして「ル・ガブリエル」でディナー。そんなパリの最高のラグジュアリーな時間が過ごせるホテル。これを「ホカンス」という言葉で表現するのは、ちょっともったいない気がしますが(笑)。



松澤 吉子 (Ichiko Matsuzawa)

(株)アイ・エム・イー代表取締役社長
ホテルジャーナリスト/エッセイスト/
プロデューサー

企業のブランディング、リブランディング、ブランドコンセプトの立ち上げ、新商品の開発、MD業務やデジタルマーケティングなどを行う。富裕層を対象とした、海外の旅、ホテル、ファッション、ビューティ、オペラ、グルメなどのテーマで新聞、雑誌、Webマガジンなどに寄稿。

■著書：フランスの3ツ星オーベルジュや英国貴族の館など、欧米の極上ホテル&スパを紹介した「世にも美しいホテル」。毎日新聞の連載コラムを編集した「いつか見た風景」。朝日新聞の連載コラムを編集した「大阪弁の本」など。